
クレヨンしんちゃん-夢を守る赤き閃光-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンしんちゃん一夢を守る赤き閃光―

【Nコード】

N89710

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

大企業『スマートブレイン』との戦いが終わり…仮面ライダーファイズⅡ乾巧はようやく自分の『夢』を持つことが出来た、巧は『夢』の実現のために園田真理、菊地啓太郎の二人としばしの別れを告げて旅に出た、その旅の途中、巧は春日部でイジメツ子にイジメられていた泣き虫なオニギリ頭の幼児と出会った…不幸なジンクスを断ち切る『赤き閃光』の物語が今、再び輝き出す

前編 一夢の守人と泣き虫オニギリー（前書き）

本作は仮面ライダー555とクレヨンしんちゃんのコラボの短期連載となります、時間軸は555最終回後、巧は真理と啓太郎の元から離れて旅に出たというオリジナルストーリーになっていますのでお読みの際にはご注意ください

前編 一夢の守人と泣き虫オニギリ

―春日部・夜。

『フン！ハッ！オラアッ！！』

『ゲフッ！？がッ！！ゴブフッ！！』

―『ソレ』は黄色く大きな眼でギリシヤ数字の『Φ（ファイ）』を象った仮面、全身を伝うように走る赤いラインが特徴の黒いスーツと銀の装甲が特徴であり、夜の闇に映える様にラインが鮮やかに輝いていた。

―その正体は『スマートブレイン』という企業が開発した強化スーツを纏った仮面の戦士・仮面ライダーファイズ。

―そして彼が今戦ってるのは全身がまるで『死者』を彷彿とさせる灰色一色の身体を持った精巧なつくりの彫像にも見える外見の異形・オルフェノク…。

―何らかの原因で死した人間が極めて低い確率で蘇生して初めて誕生する、彼ら曰く『人類の進化系』たる動植物の特質を兼ね備えた怪人である。

『ウラアッ！セヤッ！』

『ち…畜生！なんでこんなことに…ギャッ！？』

―ファイズは容赦無く、眼前にいるスズメバチの特質を持つワस्प

オルフェノクへの確にパンチやキックを叩き込み、ほぼ一方的に戦いを有利に進めていた。

『野郎、舐めやがって！ シャアアアッ！！』

『チィッ…！？』

一ワスポオルフェノクは背中から羽根を生やして飛行しながらファイズに掴みかかり、壁に叩きつけ、腕の針で突き刺そうとしたが…。

『痛ッ…てエじゃねえか、ハチ野郎…！』

『ゴハッ！？』

一しかしその勢いは最初だけな様で、すかさずファイズはワスポオルフェノクの隙について腹に向かってボディブローで攻撃して怯ませ、距離を取りながらファイズポインターと呼ばれるライト型ツールにミッションメモリーというメモリーカードを挿入しながらそれを脚にセット。

『READY』

一ベルトのバックル部分の携帯電話型ツール・ファイズフォンを開いて「ENTER」ボタンを押すと、ファイズは右脚に重心を置くよう体勢でファイズフォンを介して右脚のラインが赤く輝き出すのを確認し…動いた。

『EXCEED—CHARGE』

『ハッ！！ ハアアアアアアアアア！！』

『なんだこりゃ！？う、動けな…ぶぎゃあああああ！？』

一瞬間、脚を振り上げた途端にファイズポインターから赤い三角錐型のロックオンがワスプヘドリルの様に突き刺さってその動きを拘束し、そこへファイズが飛び蹴りを仕掛けてワスプの身体を貫いた…。

一赤い『Φ』のマークが浮かび上がると同時に、青白い炎を全身から噴き出しながらワスプは灰となって完全に消滅した。

『やれやれ…スマートブレインとの戦いはもう終わったってのに、オルフェノクだけはやたら居やがるんだな。』

一ファイズは溜め息混じりにベルトを外して変身を解くと、元の姿…無愛想な顔つきの茶髪の青年・乾巧へと戻る。

一ファイズとして社会に蔓延るオルフェノクを裏で操っていたスマートブレインとの戦いを終えた巧は現在、長い間共に過ごしてきた腐れ縁の園田真理や菊地啓太郎に『自分の夢を自分のやり方で実現するための旅がしたい』と言って彼らの元を離れた…ちなみに二人はただ一言『行ってらっしゃい』と笑顔で彼を見送ってくれた、そして日本のあちこちを旅して現在…春日部に滞在中なのである。

（オレのワガママを聞いてくれたあいっらのためにもオレが頑張るねーとな。）

一巧は自分でも知らないうちに苦笑しつつ、何も言わずに自分を見送ってくれた二人を思い出しながら彼らに感謝した。

一翌日の昼。

「じゃあ決まりだな！明日から頼むぜ、兄ちゃん。」

「どもツス…。」

一巧は旅費を稼ぐためにバイトの面接を受けていた：基本、無愛想な印象の巧をどういうわけか、バイト先のパン屋の主人がいたく彼を気に入ったため、運よくすんなりと明日から働くことが決まったのだ。

（ふう…人が良さそうなオッサンで良かった。）

一巧はこれで最低限、食いつぶぐれないことに一安心しつつ、少し遅めの昼食を取りに行くため、春日部で食べる場所を探していると近くの公園で…。

「うえええーん！！やめてよタケシく〜ん！！」

「いーもん持ってんじゃんよ、それよこせよマサオ！」

「…あん？」

一やたら情けない泣き声が聞こえたため、巧が怪訝な顔で公園を覗くと、タケシという名の小学生くらいの帽子をかぶった如何にもいじめっ子という印象しかない悪ガキが、マサオという名のオニギリに似た坊主頭の幼稚園児くらいの男の子から何かを取り上げようとしていた。

「アクション仮面のレアカードよこせて言ってんだよ！うらッ！

「！」

「ぎゃん！？うわああああん！！」

一マサオがいくら泣いてもタケシは彼が持つアクション仮面のレアカードとやらを取り上げるのをやめようとせず、それどころか最終的にはマサオを突き飛ばして無理矢理奪い取った。

「まだ持ってなかったんだよな、これ、じゃー…なッ！？」

「待って！ダメだよ返してよー！！」

一レアカードを持ち帰ろうとしたタケシの脚を掴んでマサオは泣きながら必死にしがみついた。

「てめえこの！離せ！離せてんだよ！！こいつ！しつこいぞ！？」

「嫌だー！！」

一タケシは自分の脚にしがみつくマサオを剥がそうとしたが、しつかり掴まれてるため、中々上手くいかない…やがて段々苛立ち。

「いい加減にしゃがれ！泣き虫野郎！！」

「ヒッ…！？」

一タケシはマサオの顔を殴ろうと拳を振るった、理不尽な暴力への恐怖で身体が硬直するマサオにもうじき拳が…。

「…いい加減にするのはお前だが。」

「な!？」

「え…?」

「…迫らなかった、何故ならば何時の間にか、巧がタケシの背後に回って腕を掴み、阻止したからだ…子供だろうがなんだろうが、『今までの経験』上、目の前で弱き者に対して不当な暴力を働こうとしている輩を許せるわけが無かった。」

「な…なんだよ、お前!？関係ねーだ…!!」

「…ダッセエ真似してんじゃねえよ…。」

「う…!？」

「突然の乱入者に反論しようとしたタケシだが、彼の言葉を遮る様に巧がドスの聞いた低い声でそう告げながら鋭い眼光を向けたため、タケシは殺気を感じて言葉に詰まる…。」

「…チッ!お、覚えてやがれ!!」

「…捨て台詞まで三流かよ、やっぱダッセエな、あいつ…ほらよ。」

「え?あ…ありがとうございます…。」

「巧はレアカードと捨て台詞を捨てて逃げていくタケシの後ろ姿を一瞥しながらレアカードを拾ってマサオに渡す…マサオは戸惑い一つも巧に御礼を言う。」

「しかし情けない奴だな、あんなクソ野郎に泣かされるなんてよ…。」

「うう…だって…怖かったんだもん…。」

「巧はいじめられてたマサオにも厳しくダメ出しした。」

「…けど、少なくとも最後のアレは良かったと思うぜ。」

「え？」

「だが巧はマサオがタケシへの抵抗のためにただがむしやらに、必死にしがみついたことを高く評価していた。」

「お前だってやろうと思えばやれるんだよ…最後まで諦めなきや自分自分で取り返せたな、オレが出る幕もなく。」

「けど…ぼく、泣き虫で弱虫だし…。」

「回りの奴らなんか気にすんな、お前はお前で泣き虫な部分直してみせろ、そしたら少なくとも今よか、ちったあ強くなれるぜ？んじやあな…。」

「普段口数の少ない巧はこの少年…マサオと話している今この時には自分でも内心驚くくらい饒舌になっていた、巧は自分なりにマサオにアドバースをして去ろうとした時、ピタッと止まり…。」

「あ、そうそう…今度オレ、近所のパン屋でバイトすることになったから、気が向いたら何時でも来てもいいぜ、じゃーな…。」

「あ、あの……！ぼく、佐藤マサオです！あなたは……？」

一さりげなくバイト先の宣伝までして巧が立ち去ろうとしたら、マサオが自己紹介しつつ巧の名前を聞いてきたため、巧は振り返らずに手をヒラヒラ振ってぶっきらぼうに、簡単に答えた。

「……乾巧だ。」

（乾……巧……さん。）

一臆病で弱虫な少年・マサオの目には、その男・乾巧の後ろ姿が、強く、眩しく、輝いてる様に見えたという……。

一数日後、パン屋。

「いらっしやいませー……ん？マサオと……友達か？」

「巧さん！」

「あらやだ！マサオ君の知り合いつていうからどんなかと思ったらスッゴいイケメンじゃない……！」

「えー、オラは美人のおねいさんが良かったのになー。」

「おい、失礼だろ！」

「ボー。」

「マサオが友達らしき幼児達を四人程連れて、巧がいつもと変わらぬ無愛想な接客のバイトをしているパン屋へとやって来たため、一際賑やかになる。」

「ここでの買い物に行く途中、みんなと会ったんです。」

「オラ、野原しんのすけ、五歳。」

「私、桜田ネネ！」

「風間トオルです。」

「ボー。」

「乾巧だ。」

「四人の自己紹介に巧はやはりぶっきらぼうに名乗る。」

「本当に来てくれるとは、お前も物好きだな…。」

「い、いえ、せめてもの御礼ですから…。」

「数日前にマサオに対して『情けない奴』と言ったため、もしかしたら嫌われたかも…と思ったが、あの時の宣伝を頼りに会いに来てくれるとは思ったため、巧は自他とも認める口の悪さとは裏腹に、内心嬉しく感じ、静かな笑みを浮かべる。」

「…と、その時。」

「ん…美味ですな♪はもはも…。」

「しんのすけー!？」

「「しんちゃん!!?」」

「おいしいいいいいーッ!? そのジャガイモ小僧! ナニやってんだッ!! この店は試食はやってねーぞッ!？」

「なんと、しんのすけが売り物のパンを試食と思って手づかみでいくつもムシヤムシヤ食えるという暴挙をやらかしていた…巧はあまりにも予想外な出来事に思いつ切りツツコミを入れて、しんのすけをパンコーナーから引き離す。

「あゝん…いけず〜♪」

「気色悪い声出すな、あーあ…どーすんだよ、これ…オッサンに怒られるだ…ろ…!？」

「巧は変な声を上げて顔を赤らめるしんのすけを見て、頭を抱える巧であった…ちなみに背後から殺気を感じて振り返ると…。

「いゝぬゝいゝ!!」

「…給料から引いてくれ…。」

「店長が修羅の如き怒りの形相で仁王立ちしていた…勿論、巧が責任を取ってしんのすけが食べた分を弁償したのは言うまでもない…。

「…はあ…。」

一バイト終了後、ゴタゴタや店長の説教もあって巧は疲れた表情でいた。

「なよなよするなよ。」

「それを言うならクヨクヨ…って、てめえ！まだ居たのか！？おかげで散々な目に遭ったぞ！」

「「「ヒッ!?!」」」

一さりげないボケにツツコミを入れる巧…瞬間、しんのすけの存在に気づいて物凄い剣幕で食ってかかるため、マサオ達がビビる。

「…っと、悪い、マサオ達もいたとは…。」

「え? あ…いいんです、悪いのはしんちゃんだから…ほらしんちゃん! 巧さんに謝って!」

「ゴメンくさい、ガスくさい…。」

「謝る気あんのかお前…。」

一しんのすけの誠意の籠ってない謝り方に対して青筋を浮かばせ静かに怒る巧であった。

「ところでオラ、お腹空いて力が出ない…何かおごって。」

「あんだけ食ってまだ足りねーのかアアアアアッ!?!」

「「巧さん！落ち着いてー！！」」

「さらに食べ物を要求してきたしんのすけに怒りをぶつけ、マサオ達に止められる中、巧はこう思った：『コイツは絶対オレの苦手なタイプ』だと。」

「仕方ないのでコンビニで中華まんを人数分買ってやった。」

「はもはも：うーん、寒い時期に中華まんを食べるのはオツですな。」

「本当にすみません：。」

「もう勘弁してくれ：。」

「脳天気肉まんを頬張るしんのすけとは対照的にマサオやトオル達は申し訳なさそうに謝りながら食べてた、巧はドンドンとスカスカになっていく財布を見て溜め息をついた：溜め息をすると幸せが逃げるとはよく言ったものだ。」

「巧お兄さんは食べないの？遠慮しないでいいのに：。」

「やるか！ちゅーか、なんで自分が買ったものを遠慮しなきゃならないんだ！？」

「思わず、某蛇のオルフェノクに変化する奴の口癖を言ってしまった巧、ヤケ気味でピザまんを二つに割り：。」

「ふーッ、ふーッ、ふーッ、ふーッ、ふーッ、ふーッ、ふーッ、ふーッ：。」

「「「あれ…?」」」

「めっちゃ『ふーふー』したため、全員首を傾げる。」

「もしかして、巧お兄さんって犬舌?」

「それを言うなら猫舌だろが! 悪いか?」

「しんのすけのジョークにツッコミを入れ、巧はマサオ達に視線を向けた途端に一同、『おかしくない』と言わんばかりに首を横へブンブン振りはじめた。」

「まあいいけどよ…なあお前ら、一つ聞きたいことあるんだが…。」

「「「「?」」」」

「猫舌の件から話題を変えた巧は彼らに一つ尋ねてみた。」

「お前ら…『夢』ってあるか?」

「一際真剣な表情で彼はマサオ達に『夢』について聞いてみた。」

「オラ、昨日きれいなおねいさんにいっぱい囲まれて〜。」

「布団の中で寝て見る夢じゃねーよ!! 将来やりたいこととか、仕事とかそーゆーのだ! マサオはなんかあるか?」

「ボケしかしないしんのすけを最早相手にせず、マサオに振った。」

「ぼ…僕は漫画家です！『吹雪丸』のよしいうすと先生みたいな立派な漫画家になりたいんです！！」

「おお、ちゃんとあるんじゃないか、お前らは？」

「巧はマサオの明確な夢に感心し、トオル達にも聞いてみた。」

「僕はパパみたいに一流企業に勤めたいですね。」

「ネネは女優！」

「ぼく、珍しい、石の博物館、開きたい…。」

（やっぱ皆しっかり決めてるもんだな…もしかしてオレって…。）

一人それぞれ形こそは違うものの幼稚園児である彼らの中にある確かな夢に対して、巧は『自分はもしや夢を持つのが遅過ぎたのでは？』と危機感を持ったが、気を取り直す。

「お前も少しは見習え、ジャガイモ小僧。」

「オラ、野原しんのすけだゾ！！そーゆー巧お兄さんは夢あるの？」

「馬鹿、恥ずかしくて言えるかよ。」

「「「えー！？ズルイー！！」」」

「ジャガイモ小僧呼ばわりで反論してきたしんのすけに対して、巧は捻くれた返事でごまかしたため、皆からブーブー言われた。」

「ほらほら、子供はもう帰る時間だ、じゃあな。」

「それはないよ、巧さくん!!」

「コラ、ひきょうもの!!」

一巧だけ自分の夢を語らずにサッサと帰ったため、全員スッキリしないまま帰るハメになった…。

（あ、あれは『もえP』のガチャポンだ!）

一帰る途中、トオルは近場で自分が愛してやまない女の子向けアニメ『ま・ほー少女もえP』（しんのすけ達には内緒）のガチャポンがある駄菓子屋を発見、しんのすけ達から距離を取り、隙を見てレバーを弾き…。

（やったアアアアア! シークレットレアじゃないかアアアアアア! ?）

一シークレットレアである水着姿のもえPフィギュアをゲットした、その時…。

「おや!? 君、それはもえPのシークレットレアじゃないか! !」

（ぎゃあああああ! ? なんて大声で言うのこの人! ?）

「「「「か…風間くん…。」」」」

一突然現れた眼鏡で長髪の男がシークレットレアフィギュアに大声で反応したため、トオルの秘密の趣味がバレた…ちなみにつくの

昔からもえP好きであることがバレているのをトオルは知るよしも無い…。

「ねえねえ、それ僕に頂戴よ、ロイヤルプレジデントチョコビの当たり券で当てたおもちや缶と交換してくれない？それともアクション仮面のレアカードでどう？」

「ちょ…そんな勝手に決めないでくださいよ！僕のもえPに代わりは…！」

「ええ～もったいな～い！」

「お前は黙ってろ…！」

一男がもえPフィギュアと引き替えに自分の持つ食玩やアクション仮面のレアもののグッズとの交換交渉を強引にしてきたため、トオルが断ったら、しんのすけがまたもや余計な一言を言ったため黙らせた。

「あ、あの、風間くんが…友達が嫌がってるからやめてください！」

「マサオくん！？」

一なんと、マサオが突然、男に向かってトオルに交換の意思は無いと、オドオドしながらも強く言った…それもそのはず、この状況がこの前、タケシにいじめられてアクション仮面レアカードを強奪されかけた時と重なって見えたため、放っておけなかったからだ。

「そうですよ！僕はもえPを手放すなんて出来ないんです！」

「理由が不純だけど…風間くんの物は風間の物よ！」

「他の物で、釣るやり方なんて、最、低！」

「そーだ！そーだ！」

「お前はどっちの味方だッ!？」

一勇気を出したマサオに続いてトオル達も男を非難しだした…ちなみにトオル側に寝返った(?)しんのすけがトオルにツッコまれたことは言うまでもない。

「なんだよ…交換してあげるって言ってるのに、いいから僕にもえPシークレットレアをよこせばいいんだよ!!」

一聞き分けの無い子供達(…と、彼の目には映った)に男は先程の低い物腰から態度を一変、子供相手に激しく怒りをあらわにした途端…。

『コハアアアア…』

「「「え!?!」」」

「お?」

一顔に黒い紋様が走り、瞳の色が『灰色』に染まり、男は瞬時に人間の姿から『灰色の異形』になったため、マサオ達は絶句し、しんのすけはよく解らない感じで首を傾げる…実にマイペースである。

『よこせよ！まだガチャガチャもえPのシリーズ第一弾シークレックトレアだけは持ってないんだからさアアアアア！！』

「「「うわああああ！？」」「」」

「ほっほーい。」

一男：否、全体的に花のチューリップの様な外見をしたチューリップポルフエノクが欲望丸出しで彼らに迫ったため、マサオ達は悲鳴を上げながら（しんのすけ除く）素早く逃げ出した。

『チツ：逃げ足の早い奴らだ…。』

一チューリップポルフエノクは携帯を取り出して誰かへと連絡を取る…。

『もしもし〜アユミちゃん？獲物が逃げたから捕まえて欲しいんだけど、いいかな〜？』

『はーい♪了解しましたー♪』

一電話の向こうでチューリップの仲間らしき女が可愛いアニメ声で彼の『依頼』を受け、電話を切る…。

「はあはあ…あの怪物から逃げ切れたかな…？」

「なんなのあれ!？」

「怪、物？」

「見事な灰色チューリップでしたな」

「しんちゃん呑気過ぎ！」

「狂気と恐怖のチューリップオルフェノクから全力で逃げたため、息切れしながらマサオ達は話しながら地面へへたれこむ…。

「しかし、異形の魔の手は彼らに安息すら与えなかった…。

「お帰りなさいませ〜♪ご主人様〜♪」

「「「「「？」」」」」」

「突然、背後から謎のアニメ声が聞こえてきたため、五人が振り返るとそこに居たのは…。

「ツインテールで見事なまでの童顔とアニメ声、それでいてボン！キュッ！ボン！なエロけしからんスタイルな上に胸元が大きく開いたミニスカメイド服に身を包んだ、まるで秋葉原のメイド喫茶から抜け出して来たかのようなメイドだった。

「ぼっぽ〜！？ナ：ナイスバディなメイドのおねいさ〜ん！！」

「しんのすけ！待て！春日部にメイドさんなんて明らかにおかしいだろ！？」

一興奮して汽車ポッポするしんのすけとは対照的に不審がるトオルが全力で止めた…そう、ここは春日部であって断じて秋葉原ではないのだ。

「『お仕置きメイド・アユミちゃん』、ご主人様の命令により、あなた達を捕獲しまーす♪てへっ♪」

「『お仕置きメイド』って何！？物騒な予感しかないんだけど！！」

「しかも自分で『ちゃん』付けとか寒いわ！！」

「ボ…ボ…。」

—SMとメイドを組み合わせた風俗みたいなアユミのコードネームに激しくツツコむ、マサオとネネ、ボーは青ざめた顔で静かに震えている…。

『…と、いうわけで…♪てめえら大人しく捕まりやがれですウウウウウウーッ！！キシヤアアアアアアアアアアッ！！』

「「「うぎゃああああああ！！」「」「」」

「おわああああ！！？オ…オラのアユミちゃんがあゝ！！」

—アユミは先程のアニメ声とは打って変わってドスの効いた鬼の様な怒鳴り声を上げたと共に、チューリップの男と同じ様に顔には黒

い紋様が走り、瞳が灰色に変わり、可愛い可憐なメイドさんから一変…。

一蛇と魚を組み合わせた様な世にも醜く、どギツイ、グロテスクな顔つきの全身灰色なバケモノ…ウツボの特質を持つモレイオルフエノクとなったため、全員再び悲鳴を上げた、ちなみにしんのすけは違う意味で激しくショックを受けていた。

『ホーホホホホ…逃がしませんわアアアアアア!!』

「「「「助けてエエエエエエ!!」」」」

一モレイオルフエノクに追い掛けられたしんのすけ達は再び命懸けの鬼ごっこをするハメになり、あちこちに逃げ回るが…。

『ハハ♪見つけた♪』

『あら♪ちょうど良かったですわ♪ご主人様♪』

「「「「うわああああああ!?!」」」」

一撒いたはずのチューリップが彼らの前方に現れた、前門のチューリップ、後門のウツボ…もはや万事休す…。

(た…巧さ…!!)

一マサオは恐怖に涙を溜めながら、最後に巧の名を呼んだ…。

一 オルフエノクに追い詰められたマサオ達、そしてこの場にいない
巧…春日部を舞台に、物語は佳境を迎える…。

前編 一夢の守人と泣き虫オニギリー（後書き）

どうも皆様、作者の柳雨という者です

突如、『仮面ライダー555』への熱が再燃してきたため、思わず書いてしまいました、しかし555に関しては約6・7年くらいの記憶のブランクがあるため、巧の性格違って見えたら555ファンの皆様すみません：

今回の主役である、ぶっきらぼうな巧と泣き虫オニギリなマサオくん、実に正反対なこの組み合わせをふと思いつき、むしろそれだけで書いた様なものです（何）

最初はシリアス路線でいこうかなと思いましたが、クレヨンしんちゃんにギャグは付き物なのでしんのすけにはかなりボケさせました（おい柳雨）

敵であるオリジナルのオルフェノクの二人、眼鏡の男は適当に考えましたが、メイドのアユミのモデルは『涼宮ハルヒの憂鬱』の映画撮影時のコス朝比奈みくるです、しかしアレンジも加えた結果、正体共々色々とギツイことになりましたが…（汗）

次回は後編、マサオ達を助けるためにオルフェノク二人とのバトルが勃発します

それでは、また次回、柳雨でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8971o/>

クレヨンしんちゃん-夢を守る赤き閃光-

2010年11月14日01時10分発行